

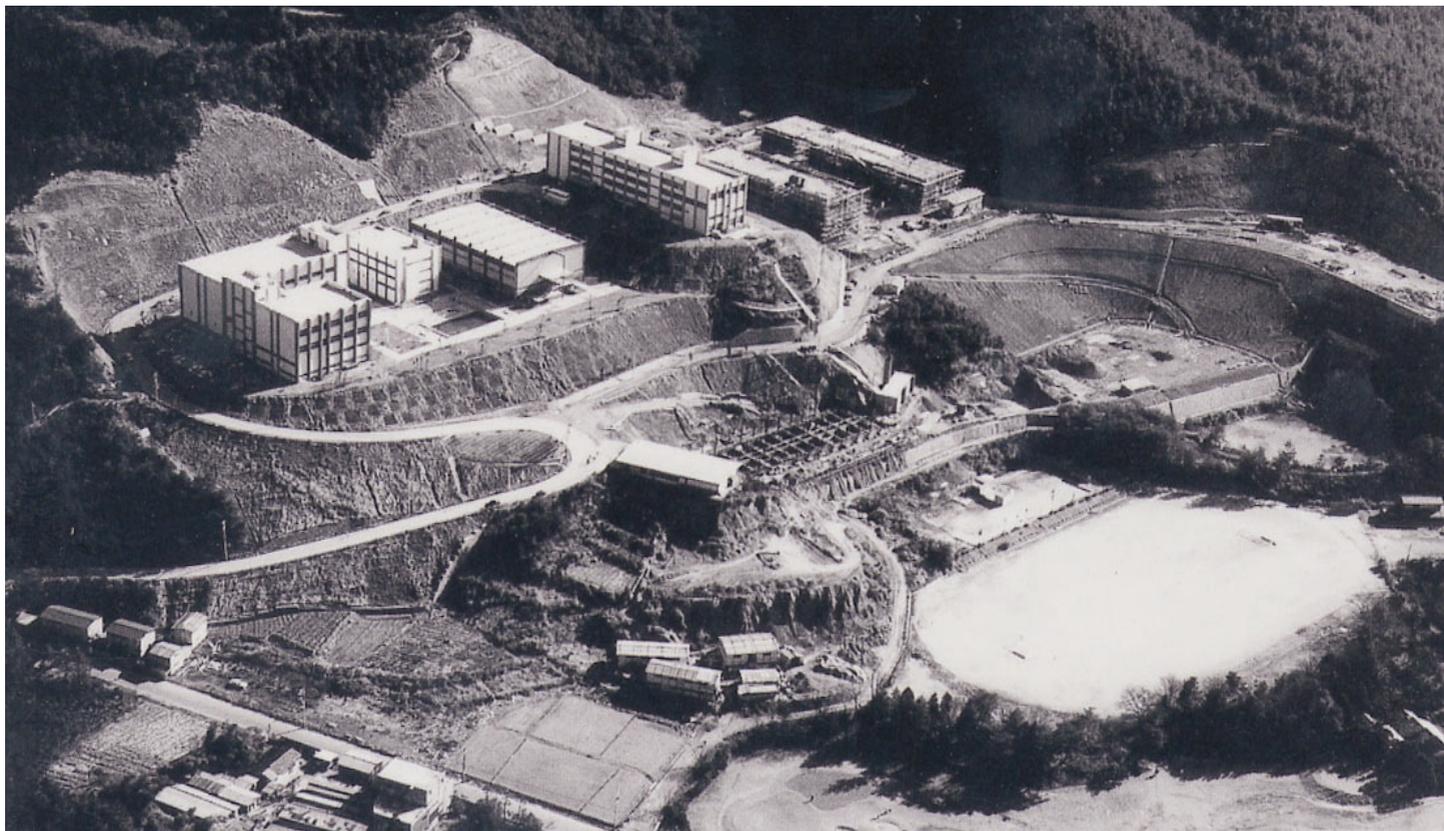
第 篇

インタビューと写真でつづる

40年の歩み







開学間もない「本山地区」のキャンパスである。写真中央の一段と高いところに本館が建っている。そこから北へ（写真の左下方へ）旧体育館、計算機センター、1号館が並ぶ。本館から南へ（右上方へ）2号館（理学部棟）、3号館（外国語学部棟）が全容をみせ始めた。4号館（法学部棟、1967.8完成）は基礎工事にとりかかったところ。右方に白く光っているのが立命館グラウンドで、2005年現在、中央図書館、第1、第2実験室棟、第2研究室棟が建っている（1966年撮影）

未完の大学 「柘野と問いて訪ねて来てみれば、竹の林で人家いづくぞ」と、京都の古歌にある。元禄時代に開墾された柘野は、京都・上賀茂の外縁に広がる農村地帯であった。

1963(昭和38)年から翌年にかけて、本学の創設者・荒木俊馬が、その柘野を見下ろす本山の国有林で校地を探していたころ、地道の鞍馬街道が柘野を貫いていた。京都バスがときおり土煙を引いて、のんびり走る。1955年に始まり、1973年の第1次石油ショックまで続く高度経済成長の中間点の時期である。

経済の発展に伴って、教育の領域にも変容が起こっていた。高等教育へ向かう若者が増え続けた。加えて第1次ベビーブームの波が、高等教育進学期に達し始めた。わが国を経済大国に押し上げる原動力になり、2005年ごろから60歳の定年期を迎えることになる「団塊の世代」が、そのころ大学の門に押し寄せ始めたのである。

開学後の本学は、急速な発展を遂げた。学舎と教授陣の充実、大学首脳陣は明け暮れた。「進学率の急増。右肩上がりの18歳人口。このふたつを見通していたのか」と新聞記者から問われると、荒木は「教育は、商売ではない」と、きっぱり否定した。

1960年と1970年。ふたつの安保闘争のはざま、国論は賛否ふたつに割れた。いわば国民が日本国の存亡を真剣

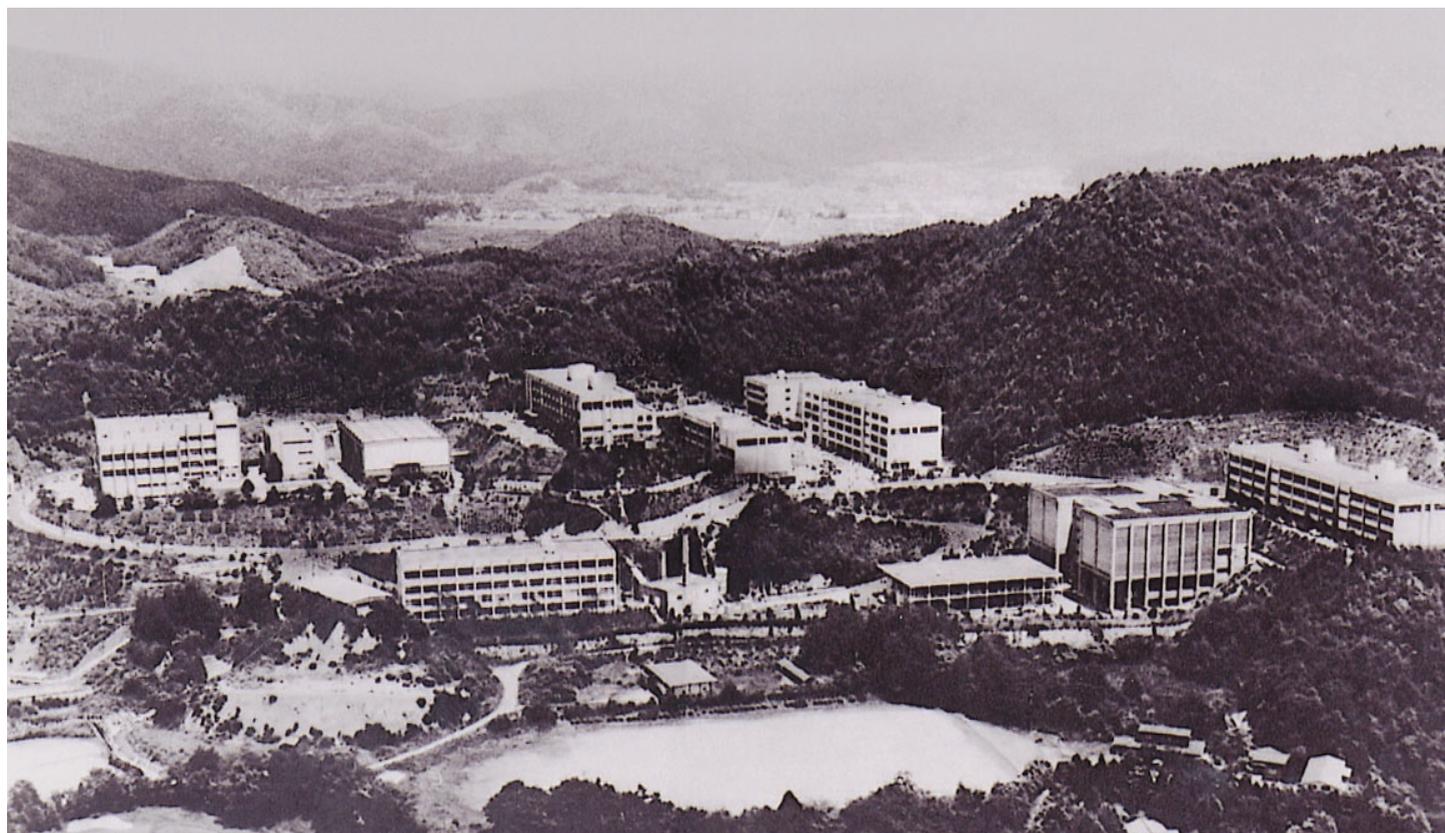
に論議している、緊迫の世相の中での開学であった。愛国者・荒木にとって、眼中に映るのはただひとつ「日本の未来」、そのみであったに違いない。

1977年の京都産業大学報で「これからは質的な発展に献身したい。わが大学づくりは未完である」と大学の進む方向を示唆した。逝去の前年であった。

国内外の大きな出来事

～1965

- 1959. 60年安保闘争始まる
- 1960. 7 岸信介内閣総辞職
- 60. 10 浅沼稲次郎社会党委員長、少年に刺殺される
- 1961. 4 ソ連ガガーリン少佐、人類初の宇宙飛行
- 61. 8 東ドイツ、ベルリンの壁を構築
- 1962. 2 東京都人口、世界初の1000万人
- 62. 10 キューバ危機
- 1963. 3 吉展ちゃん誘拐事件、起こる
- 63. 11 ケネディ米大統領暗殺
- 1964. 10 東海道新幹線開業
- 東京オリンピック開催
- 1965. 1 中教審、「期待される人間像」の中間草案発表
- 65. 2 ベトナム戦争、米軍北爆開始
- 1965. 4 平平連、初のデモ
- 65. 6 家永三郎教授、教科書検定を違憲として国家賠償請求訴訟提訴
- 65. 8 佐藤栄作、首相として戦後初の沖縄訪問
- 65. 11 戦後初の赤字国債発行を閣議決定
- 65. 12 国連安保理事会の非常任理事国に日本当選



開学のあと、しばらくは量的拡大に対応するための建築ラッシュが続いた。10年経ったこのころになると、それも小休止に入った。開学時に比べると、キャンパスは南へ、西へ、伸びた。5号館、大教室棟、法学部棟が完成している。教学面としては中央図書館や実験室、研究室の建設が待たれていた。厚生施設やスポーツ寮も増やしたい。課外活動の強化をめざすためにグラウンドの拡充などの青写真づくりが始まった(1975年撮影)

みなぎる自信と誇り 「まるで、工事現場で講義を受けているような状態やった」。1期生ら初期の卒業生に、学窓の思い出を尋ねると、こんな言葉がよく、かえってくる。教授の話が聴きにくかったというような嘆きの響きは、口調からは感じられない。戦前派の大学を、一気に追い越した本学の急成長期を見届けた体験を楽しむ風情が、濃厚である。

講義室、研究施設、体育館、食堂、学生寮、学内道路、造園、総合グラウンド...用地の造成と、施設設備の建築工事が休みなく続いた。1969年、在学生10,000人超。激増への対応として1969年4月1日、新入の教職員103人発令。学内の意思疎通を図るための大学報創刊。

この年3月、本学初の卒業式が挙行された。京都産業大学報創刊号(1969.4.21)は「卒業生は経済学部528人、理学部42人。在校生代表の山科喜雄君の送辞、卒業生代表の山田修平君の答辞。引き続き新装の第1食堂で祝賀パーティ」と伝えている。未開の荒れ野に入植したフロンティア、ともいえる1期生の、先輩のいない実社会への船出であった。

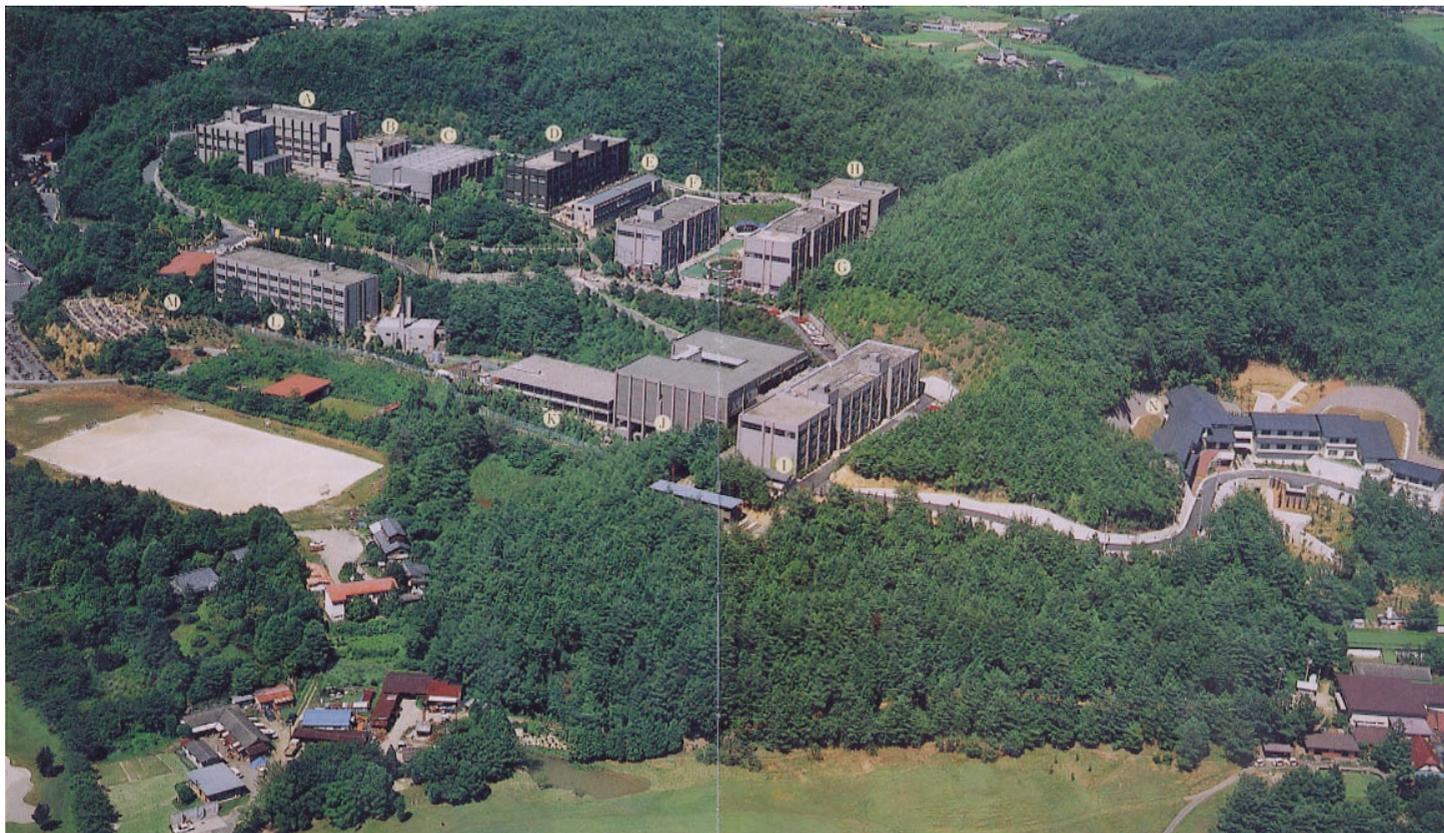
開学初期、本学の発展を支えたのは、学生の中にみなぎる自信と誇りであった。「京の大道を闊歩して産大生の意気を示そう」という創設者の呼びかけに、一斉に反応した。体育祭の市中パレードは、秋の京を産大生の活気

で彩った。たとえば1972年秋、市役所前から円山音楽堂の前夜祭会場まで、体育会クラブの1,000人が1kmにわたって日頃の鍛錬を披露した。量と質。ともに急成長した時期、それが開学からの10年間であった。

国内外の大きな出来事

1966 ~ 1975

- 1966. 8 北京の天安門広場で文化大革命祝賀の紅衛兵100万人集会
- 1967. 4 東京に革新の美濃部亮吉・都知事
- 67. 8 公害対策基本法公布
- 1968. 1 東大紛争始まる(6~7月、安田講堂占拠)
- 68. 5 パリで学生、労働者、ゼネスト。全仏に拡大
- 68. 8 札幌医大で日本初の心臓移植
- 1969. 1 機動隊、安田講堂の封鎖解除。東大の69年度入試中止決定
- 69. 7 アポロ11号(アームストロング船長)の飛行士、初の月面着陸
- 1970. 3 大阪・千里で日本万国博開催
- 日航機よど号のハイジャック
- 1971. 6 沖縄返還協定調印
- 1972. 2 連合赤軍による浅間山荘事件
- 72. 9 日中国交正常化
- 1974. 3 小野田さん、ルバング島で発見
- 74. 8 ニクソン米大統領、ウォーターゲート事件で辞任
- 三菱重工ビル爆破事件
- 1975. 4 ベトナム戦争終結
- 75.11 第1回サミット、フランスのランブイエ城で



大学を取り巻く自然環境は、洛北の自然をようやく取り戻そうとしている。造成によって赤茶けていた大地を緑が覆う。庭園化構想が実を結び、教育と研究の環境が一段と、整った。南へ伸びるキャンパスの先端は、第1研究室棟（写真右端のあたり）に達した。元立命館グラウンドの買収に成功、中央図書館着工の時期を迎えた（1985年撮影）

Ⓐ 1号館 Ⓑ 計算機センター（計算機科学研究所棟）Ⓒ 体育館 Ⓓ 本館 Ⓔ 保健管理センター Ⓕ 2号館 Ⓖ 3号館 Ⓗ 7号館 Ⓘ 5号館 Ⓙ 大教室棟
Ⓚ 8号館 Ⓛ 4号館 Ⓜ 学生休憩室 Ⓝ 第1研究室棟

四季の色鮮やかな「学びの園」 竹博士の異名のあった創設期の教授、上田弘一郎は、本学的美観を整えた最大の功労者である。

その回想記によると、開学したての大学は、山を削り盛り土をして校地を造成したから、緑の衣装が剥ぎ取られた。赤茶けた山肌に白亜の本館が孤立していたという。首脳陣は、増え続ける学生、教職員への対応に多忙を極めた。風致地区でもあり、景観の改善に力を入れる必要は認めるのだが、実行部隊がない。そこで、教授は、京大から自ら耕耘機を借りて来た。堅い土を掘り起こして苗床をつくった。大切に育てた苗木を、学内に植えて回った。日曜出勤続き。休んだら、苗も植えたての木や竹も、枯れてしまう。

痩せた土地に育つツツジとサツキを植えた。黄色い花のエニシダも随所に。本館脇にメタセコイア。教養部（現在の1号館）の土堤の桜は1本300円で買って来た。玄関入り口の楠は運搬費と植付け料で50,000円、上田教授の月給より高かったが「産大の隆盛を末長く見守る木だから」と、購入してもらったそうである。園芸部員の協力で、創立20年までには学内は緑と五彩の花で埋まり、庭園キャンパスの原形が固まった。

2004年、大木に成長した本館脇のメタセコイアが全て、伐り倒された。根っこまで掘り起こしての処分である。

本館玄関の紅梅白梅とともに開学時の面影を伝えていたのになぜ。問題は、旺盛な生命力にあった。本館の側壁を越えて伸び続けた無数の根が、水分をもとめて本館の土管を突き抜け、建物を危険にさらしかねなかったという。さすがの博士も予想しなかった事態であった。大学の先行きについても、エリート養成段階にあった開学時には予測もなかった「大学全入」のユニバーサル時代がいま、迫った。40年の歳月は、重い。

国内外の大きな出来事

1976 ~ 1985

- 1976. 7 田中前首相、逮捕される
- 1977. 9 日本赤軍が日航機ハイジャック、拘留中の同志の釈放要求、政府容認（ダッカ事件）
- 1978. 5 新東京国際（成田）空港の開港
- 1979. 12 ソ連、アフガニスタン侵攻
- 1980. 5 韓国の光州事件、金大中逮捕、反政府デモ制圧で死者多数
- 80. 9 イラン・イラク戦争本格化
- 1981. 1 中国、4人組裁判で江青らに死刑判決
- 81. 3 中国残留孤児、初の正式来日
- 1982. 2 ホテル・ニュージャパン火災
- 82. 5 富士通のワープロ「マイオアシス」発売、ワープロ時代へ
- 1983. 8 フィリピンのアキノ元上院議員暗殺、反政府運動激化
- 83. 9 ソ連が大韓航空機撃墜、269人全員死亡
- 1984. 7 ロサンゼルス・オリンピックにソ連など不参加
- 1985. 5 西ドイツ大統領のヴァイツゼッカー、終戦記念日に講演「荒れ野の40年」



起伏のある本山の校地は、標高順に3層に分かれる。いちばん上は、本館や1号館といった開学初期の建物がたつ。中層は、三差路のあたりと同じ等高線上に出入口を持つ建物群で、大教室棟、5号館などがある。最も下は鞍馬街道と似た標高で、中央図書館(1987年完成) 工学部棟(1987年に第1実験室棟の完成) 神山ホール(1992年完成)などが建っている。10年前の写真に比べると、その間に鞍馬街道の等高線上に大型建築物誕生を知ることができる(1994年撮影)

美しい日本 京都産業大学の敷地は、起伏に富んでいる。バスを降りて講義室へ向かう道は、夏期には衣服を汗で濡らしてしまふ。冬には吐く息が喘ぎ声を伴う厳しさがある。そこで、20世紀最後の2000年、せめて足取りの辛さの半減を、とエスカレーターが設けられた。バスプールから三差路まで、階段100段分の上り道が楽になった。柵野の景観に視線を走らせる余裕が生まれた。ところが、開学から10数年を経たころ理学部長を務めた前田憲一教授は、エスカレーターもエレベーターも無用論者であった。もちろん、学問研究の場面の話である。「エレベーターのない高層建築」という一文によると、学問は、多くの先人によって造られた建物であるという。強固な基礎の上に空高くそびえていて、内部は精緻な構造を持っている。理系の学問を例にとれば、ひとつの領域に高層の建物群が立ち並んでいる。教師は、この建物群のどれかに、学生を導き入れて、建物を鑑賞し、やがて登り始める意欲を引き出す手引き役である、と教師の機能を述べた。「肝心なことは、この高層建築は、1歩ずつ、ただひたすら自らの足で踏みしめて登るしかない。上に上がれば、新しい展望が開けて、訪れる部屋は美しくなる」と、学問に励むように勧めている。前田教授は「学問の世界は美しい」という表現で、学生

を学問の建物に誘った。学問には、妥協、ごまかし、嘘といった技巧の入り込む余地がない。科学的な真理に肉薄し追究すること、それだけが必要な聖域である。だからこそ、「美しいのだ」と述べている。美しい日本と日本人をつくること。これが、本学創設の心である。

国内外の大きな出来事

1986 ~ 1995

(昭和61) (平成7)

- 1986. 1 米スペースシャトル・チャレンジャー爆発、乗組員全員死亡
- 86. 4 ソ連のチェルノブイリ原発事故
- 1987. 4 国鉄の分割民営化
- 87. 10 ニューヨーク株式市場で大暴落
- 87. 11 大韓航空機爆破事件
- 1988. 4 瀬戸大橋開通
- 88. 6 リクルート事件発覚
- 1989. 1 昭和から平成へ
- 89. 4 消費税始まる(3%)
- 89. 11 ベルリンの壁の撤去始まる
- 1990. バブルの崩壊
- 90. 8 イラク軍のクウェート侵攻
- 90. 10 東西ドイツ統一
- 1991. 1 湾岸戦争開戦
- 91. 12 ソ連邦の消滅
- 1992. 5 日本新党結成(93年、細川内閣誕生)
- 1994. 6 松本サリン事件起きる
- 94. 9 関西国際空港開港
- 1995. 1 阪神淡路大震災

建学の旗「日本を担う人づくり」を高く掲げる



けんざん
研鑽 40年 「Not four years, but forty years.」を標語に掲げたアメリカの大学があるという一文を、ざっと4半世紀前の京都産業大学報に当時の経営学部長の西村民之助・教授が寄せている。大学での学業の修練は、4年間では終わらない。その10倍、40年は続けられねばならない、という意味だ、と説明している。

さらに西村教授は、卒業式（学位授与式）の英語 Commencement は「始まり」という言葉であり、卒業式は、いよいよ本当の学業を始めようとするための儀式なのである、と付け加えている。

終戦まで京大教授を務めた天文学者・荒木俊馬は、安保闘争さなかの1965(昭和40)年、「日本の未来を担う『骨太』の人材を育てる」と決意。理想とする教育を実現するために、徒手空拳、教育にかける情熱だけを頼りに本学を創設した。学長、総長に就いたあと、建学の心を尋ねられると「卒業生の将来が、わが大学の理想を示す」と自信満々に答えた。『骨太』という表現を、荒木が回想記に記した、建学の経緯と目的に照らして言い換えれば、「自分の信念を貫く」「他人の言説に動揺しない」「国際社会に出て、よその国のひとたちから信頼を勝ち

える」ひとである。あるいは「社会的な責任を果たすひと」「人倫の道を踏まえたひと」。つまり、美しい日本の魂を持つひとであろう。

開学から40年の歳月が経った。京都産業大学から巣立った若者たちが、修練の成果を問われる時期に入った。各界に築かれた雄大な産大人脈を遠望するとき、弛まらずに修練を重ねた卒業生の研鑽の日々を確認する思いがある。創設者・荒木俊馬の描いた理想の大学がいま、ここ本山・神山一帯に広がっている。



総合グラウンド (2005.5撮影)

京都産業大学 教学の40年

学長 坂井 東洋男に聴く

創設者の建学の精神について

〔京都産業大学は1965(昭和40)年、京都・洛北の景勝の地に創設された。千年紀という歴史の大きな節目をはさんで、こととして開学から40年、本学は不惑の歳を迎えた。この間、世界もわが国も、大学を取り巻く環境も、大きく変わった。本学もまた、教育研究のあり方について、改革につく改革を重ねてきている。変容は、とどまることがない。〕

坂井 本学の創設者である荒木俊馬先生は、入学式や卒業式、あるいは学内報や学生、教職員との対話のなかで、本学創設の動機と理念について、語っている。その核心は、聴いたひと読むひとそれぞれであるが、私は「いかなる時局においても独自の見解を貫く」付和雷同せぬ、ということに、荒木先生の心が最もよく示されていると思う。荒木先生は「産学協同」という言葉が、大学人にとって口に出すべきではない、というような時代に、その必要を説き、あえて大学名に「産業」の二文字を加えた。社会と遊離して大学は成り立たない、という考えであろう。

しかし、産学協同をもとめる声の背後に、冷徹な眼を向けていたと思う。資金が不足して、設立が危うくなったとき、商売に役立たせよう、という出資者が現われた。そのとき「だれにも大学の運営に口出しをさせない」として、出資を断った挿話が知られている。大学が社会とは無縁であろうはずはない。そうではあっても、大学の教育と研究は、大学人がだれからも拘束されない環境で進められなくてはならない、という考えをはっきりと示している。

近年は、風向きが変わって、産官学の連携が盛んに説かれるようになった。たしかに、大学だけの力で研究するよりも、力を合わせて世界に挑戦する方がよいに違いない。国公立の大学で、「協働」の動きが目立つ。そのために、荒木先生の産学協同に対して、先見性を称賛する向きがあるが、実は荒木先生は不動であった。巨木のまわりの風景が変わった、ということであろう。先生はまさに、時流に流されない気概のひとであった。だからこそ「気概溢れるひと」「世の中に迎合しないひと」を育成しようとしたのである。

荒木先生の遺跡を継ぐ者として私は、学生諸君について真偽のほどを確かめないで付和雷同するような薄っぺらな人物にならないでほしいと願っている。多少、野暮っ

たくてもいい。目先の利く人間よりも、重厚な人間になってほしい。それが建学の心だったと思う。

教養教育の変遷

〔戦後の新制大学は、一般教養教育に特色があった。人文科学、社会科学、自然科学の3分野均等履修方式である。学生は、この「一般教養」と、それに続く「専門課程」を合わせて学ぶことによって学士号を取得できるとする方式。しかし、1960(昭和35)年代に入ると、この一般教養教育に対して、批判が浴びせられるようになった。高度経済成長を背景に進学率が伸びた。大学は、急速にマス化していく。高等教育の大衆化という新しい潮流を、最初に受け止める役割を担ったのは各大学の一般教養教育課程であった。学生は、用意されている科目や教授陣、施設や設備について、旧態依然としている、抜本的に改善せよ、の声をあげた。それらがやがて大学紛争として全国に広がった。大学で一刻も早く専門教育を学びたい、という向学心が、一般教養の2年間にしぼんでしまう、という批判も強かった。教養と専門の授業を楔形くまびがたに組み合わせ、新しい方式が模索された。政財界からは、紛争の拠点がおもに教養部であることに不満が出された。一般教養教育は、嵐の中にあった。〕

坂井 大学組織の変遷は、社会と大学の描く「学生像」の変容を反映している。いま、学部も昔流に言えば教養教育。そして大学院において、かつてのような専門教育を施す。だから学部での専門教育は、あくまでも基礎的な教育。

大学の教育でいま最も重要なものは何かというと、全人教育だと考えている。教育の根幹は、「考える力」「哲学」であろう。哲学というと誤解を招くのであれば、「ものを



かつての教養部（大学案内1976）

考える力。『総合的な思考力』あるいは『人間力』何かを学ぶとき、本来は物から出発して、抽象的な思考に発展していく。ところが、いまは子どものころからバーチャルな世界に生きている。テレビやパソコンにずっと対面して、自然から隔たったところ、密室的なところに暮らしている。そうすると、ものを考えるときの素材が、まわりがない。学校教育以前の、社会の問題でもあろうと思うけれども、非常に深刻な問題というべきであろう。

本学が発足して間も無いころ、荒木先生によると、東京の学生がやってきて「建物は立派だが、中で雀を飼っているんじゃないですか」と言ったそうである。そのとき先生は「いまは雀かもしれないけれども、卒業するときにはおどり鵬になって社会に羽ばたくんだ」と言い聞かせたという。みんながみんな、鵬になるわけではない。いかにして鵬にするか。教職員、大学を挙げて、ひとりひとりの学生と向き合っていく心構え、荒木先生の考えがいまも本学に脈打っている。

では、その鵬とは何か。たくさんの知識をもっていたら鵬か。そうではない。ものを分析し、実際に目の前で起こっている現象に対して、分析し考える。そういう力。考え、分析し、それに評価を与えるところに人間性が出てくる。その人が生まれ育って、大学、社会人になるまでの人間的なものが、反映してくる。厚みのある、人間性豊かな人物、そして思考力、ものを考える力を持ったひと。そうした人材を育てようとしたのが、荒木俊馬先生であった。けっして、学校秀才を育てようとしたわけではない。時間はかかっても、ながい目で見ると評価を受けよう、そういう卒業生を育成しよう、と。

そのことは、開学40年のいま実を結んでいる、と自信を持って言うことができる。本学では初期の卒業生の評価が高いが、いま30歳ぐらいの諸君も活躍している。先日、外国語学部の私の直接の教え子の同窓会があった。クラブ活動に打ち込んでいて「大丈夫かなあ」と心配していた学生がいた。もちろん中国語はあまりできなかった。それがいま、上海で大活躍している。中国語は流暢なものだ。そういう諸君が、たくさんいる。根底の『人間的な力』がはぐくまれていたから、社会人になってから伸びたのであろう。

人間的な力、それから『思考力』これを育成するために4年間がある。これを教養教育というのであれば、専門教育を含めて教養教育と私は呼びたい。本学は近年、委員会方式にした。教養教育も全部、学部でやっていただく。ただ、7つの学部がばらばらではいけないので、基本的な科目については、京都産業大学の学生である以上、こういう考え方、そして知識、こういうものについては最低限、身につけていただきたいというものについては全学

的にやっ払いこうと。学部それぞれにおいて、どういう学生像、卒業生像を描くか。これが学部の教育理念とか教育目標である。

学生の質の多様化

[21世紀に起こるわが国の社会変化について、1980年代なかばの臨時教育審議会は、成熟化、国際化、情報社会化、生涯学習社会化というキーワードを挙げた。学生の質が多様化する。学生は18歳の時だけに入ってくるわけではない。次の飛躍に備えるために社会人になったあと、再教育を受けにくる。勉強の時間を得た高齢者がくる。学士入学、編入、検定合格者、海外からの留学生も増える。多様な学生のもつめに応じる必要がある、と提言した。]



坂井学長

坂井 この10年間ぐらいで、大学は様変わりした。なかば義務教育化したから。「大学ぐらい行きなさいよ」と家で言われて、不本意ながら進学してくるひとを見受ける。大学としては、だから『学ぶ』ことの動機づけを考える時代になった。

たとえばキャリア教育だが、大学で職業観とか勤労観をみつけるというのは、おかしなことではある。4年間、大学で学び、授業の中身を突き詰めていく。そういう生活を通じて、クラブ活動なども通じて、結果的に自分はこのところに向いていると気づき、仕事を選ぶのが筋道であろう。

だが、いまはそれでは遅い。競争に負ける。入学時から、職業観、勤労観を身につけさせようと力を入れねばならない。たしかにインターンシップがきっかけになって学ぶ意欲の出ることもあるだろう。それに、キャリア教育には、社会性を身につけさせる力がある。

学生の気質について「ちょっと、変わってきたかな」と思ったのが、15、16年ぐらい前。教壇で喋ったときに、それまでだったらきちんと反応したところで、反応がなくなった。「テレビを見るように私を見ている」と感じた。振り返ると、この学生たちは「子どものころからテレビだけで育ってきた世代」だった。そのあとパソコンとインターネット、携帯電話の出現で、またちょっと変わってきている。ところが、反応しないので、全然わかっていないのかというと、後で話をすると、「けっこうあれはおもしろかった」と言う。以前は、賑やかなぐらいに反応

したように思うのだが。インターンシップで現場に送り込む意義は、そうした無反応世代に、刺激を与える効果があると思う。

裸になって行動する中で失敗を重ねながら、世の中の仕組みが少しずつわかっていく。そういう点では、家庭と教室を往復するだけではなくて、クラブ活動も大事だと思う。課外活動は、わずらわしいといえばわずらわしい。人間関係がついてくるし、約束ごともある。仲間内でもあるし、大学との関係でも、公認のクラブになれば義務が伴う。だが、やってみて、はじめて達成感が生まれる。自信にもつながる。クラブ活動とか、インターンシップで就業体験を積むこととか、留学することとか、大いに勧めたい。

自分を鍛えるには、留学先はアジアがいい。対等の目線でつきあえる。自分の世界に閉じこもっていたのでは、海外では生きていけないから。「はい、はい」と黙っていたら、どんどん不利になっていく。大学の寮費にしても、何にしても、言われたままだったら、とんでもない金額をふっかけられる。日本の社会と海外の国々とは全く違う。水道の閉まりが悪い、トイレがおかしい、電気がつきにくい、というのは全部、交渉しないといけない。そういった経験を積むことで、帰ってきた学生は、すごくたくましくなっている。

大学改革……FD(Faculty Development)

〔大学においては、良い研究者が優れた教員だとする評価が根強い。しかし大学教育が大衆化した現代では、そうした研究偏重の風土は改善されなくてはならない。教員は教育能力や教育技術の向上に努める必要がある。学生の学ぶ力を引き出す努力がいる。そのためには教員の自己啓発や相互評価が大切である。おおよそ、このような主旨でFDが重要視されるようになった。〕

〔少子化による18歳人口の減少が最も顕著に現われるのは2009(平成21)年であるが、前倒しの形で2007年にはわが国の大学は全入時代に入る。高等教育の入り口にあった垣根が崩れる時がきた。当然のことながら、大学の意識改革と、新しい事態に対応する大学自体の変化がもたらされることになる。本学は「教育エクセレンス支援センター」を立ちあげ「教員相互の授業公開」を実施。授業評価、教員評価も導入して、新しい変化に備えている。〕

坂井 授業技術の改善について、いかにして私語をなくすか。新人の教員に年2回、研修会を開く。「こういう工夫してます」と披露し合う。あるひとは学生に「君」と呼びかけることを心がけている。名前を知ることが

大事だと考えているから。あるイギリス人の先生は「What's your name?」と何度も何度も指名することによって、全員の名前を覚えることにまず集中するという。あるいは座席を決めて、名前を覚える。それによって私語をなくす。受講態度のよくない学生に対して、よく語りかける。そうすると、態度が変わってくる。大教室で授業をしている本学の若い教員から「私語は全くない」と報告がある。工夫に加えて、講義に臨む気迫もいる。ある教員は「今日は君たちには退屈な話をします」と言って、学会の最先端の議論を話す。学生に興味をもたせることは大事だけれども、研究というのはどういうことか、この分野ではいま、どういうことが問題になっているかを話す。そして、刺激を与える。

FD推進委員会の委員は全部、各学部から私が指名した。学部代表の委員制では、委員が同僚に気をつかい、抜本的な提案が出てこない心配があったからである。関西の大学で、教員評価を導入できたのは、大規模大学では本学だけではないか。

教育、授業評価も全部入る。研究と学内貢献も。それから社会的な活動も、評価項目の中にある。重要なことは、教員が、教育について、どういう哲学をもっているか。要するに教育哲学を問いたいのである。つまり「あなたのその考え方はよろしくない」あるいは「すばらしい」とか、そういう点を評価したい。また学生に教員の評価ができるか、という危惧はある。けれども教育にかける教師の気持ちは学生に必ず伝わると信じている。

本学の初期のころ、著名な大先生方がおられた。学生諸君に、教科の内容を理解されるようにかみ砕いて話をされたかどうか、疑問なケースもあったとか。大先生は、自分の世界に没頭して、声が最前列でも聞こえなかったという。だが、教育は知識の伝授だけではない。その先生の人間性とか、学問にかける情熱みたいなものが、学生には学問の内容がわからなくても、授業を通して、その響けに接し、言葉だけではなくて姿かたち、その表情、それらから伝わっていく「何か」があることも否定できない。知識としては何も伝わらなくても、本質的な意味で、いい教育をされたということはあると思う。世の中へ出て、何かのときに「ああ、その先生に私は学んだ」とか「あの著名な先生の授業はこうだった」と。その学生にとっては財産だと思う。

一拠点大学を貫く

〔インターンシップの本質は、大学の育成した学生を、社会のひとつの分野に送り出すことによって、わが国の将来に貢献したい、という大学の考えを示すところにある。〕

坂井 創設者の荒木俊馬先生ご存命中のことだが、30年前に書かれた、教育改革に関する教授陣の議論のメモが残っている。その中に「学生はなぜ勉強しないか」「どうしたら意欲を引き出せるか」などとある。いまま昔も教師の悩みは変わらない。

だが、違うところも少なくない。いまは、セメスター制。メモのころは、たとえば前期、全く授業に出ずに放浪して、秋に帰ってきて、それから頑張ってもなんとか必要単位は取れた。いまの制度では完全にゼロ単位である。初期の学生諸君は、教科書に向かうよりも、他の勉強をしていたと思う。いま大手企業の役員になっているひとに聞くと「旅行はしょっちゅうしていた」「いろんな本を読んだ。教科書以外の雑学」と言う。大学時代に大事なことは、体験とか知識の吸収のあり方であろう。

いまの学生は履修する科目に関連する知識を修得しようと努める。その半面、行動する、あるいは行動を通して失敗、経験から自分の内部にいろいろなものを蓄積し、それがいずれは、ものを考えたり判断する材料になる。まさに自分の宝物。そういう意味での勉強とか経験、それが不足しているのではないか。

フレキシブル・カリキュラムによって、刺激を受けること。刺激はどこから受けるかという、異分野との交流、接触から受ける。また学内を動くこと。動くというのは、自分の専門が文系であるとするれば、社会科学系あるいは自然科学系という異分野との接触を指す。自分の殻から脱皮し、枠を超えて成長していくきっかけになる。クラブ活動にしてもそうだし、性格とか傾向の違うひととの接触も。本学が「一拠点大学」を貫いている理由である。友だちとしては、できるだけ異質のひと、性格の違うひとと交わるのは大事なこと。自分の殻を破るきっかけをつくる。カリキュラムでも同じことがいえる。「融合的なカリキュラム」というのは、たとえば工学部の学生が、マネジメントの科目と結びつく。数学と経済とが結びつく金融工学とか。本学は現在、試みているが、もう少し組織的に大がかりに展開したい。

開学50年に実現すべき課題をグランドデザインとしてまとめたばかりだが、そこで異分野間の融合的なカリキュラムをつくっていかようとしている。狭間（学際）的な、専門分野の境界線にあるような科目。その分野の専門家は、いないようなものだから、これは教員みずから殻を

破っていかねばならない。教えるために一から勉強し直して、学生に伝える。そのときの苦しみ。たまに間違いもあるかもしれないけれども、学生には非常にわかりやすく教えるという意味では、新しい科目を担当するのはいいことではないか。

入試制度は変遷を重ねてきた。卒業生の理想像をにらんで、入試を改革するのが本筋だと考えるが、学生が非常に多様化している現状からすると、4年後の理想像を描きにくい。それに関心も多様化している。スポーツやクラブ活動に長けている学生もいる。AO入試では、この分野について自分はこういうことに打ち込んで経験してきたとか。あるいは総合的な学力を備えた学生もいる。そういう多様な学生を入学させ、それぞれの長所を活かしていくのがいまの教育の理想ではないか。多彩な学生諸君に集まってもらうということで、入試形態を多様化させてきている。

そのためには、カリキュラムを充実する、変えていかななくてはならない。課外活動は、成績評価に反映させている。自己申告で、8単位ぐらいまで。自己啓発という意味で、課外活動だけではないが、ボランティア活動なども含めて、3種類ある。これは新田政則学長時代から始まった。課外活動もあるし、ボランティア活動もある。海外に行って、見聞を広めてくる。そういうことを奨励する意図をもって、単位化した。ただし、無限にこれを増やしていくわけにはいかない。本学はもともと課外活動が全国的にみても活発な大学だった、ということもある。クラブ活動で、スポーツの場合には、先日も硬式野球で神宮で戦った。あの目の前で繰り広げられている熱戦に、手に汗握って、卒業生と在学学生、教職員、もちろん実際にプレーしている諸君、応援団、これらがひとつになれるという意味で、教育として重要視するのは当然であろう。

交流協定校の拡大と国際交流

〔朝日新聞の大学満足度調査が以前に行われた。非常に満足度の高い大学は、国立の京都大学。私学は、本学が全国の最上位。大学生生活を過ごして、非常に楽しかった、満足したということ。学業だけではなくて、クラブ活動でも達成感を与えることができたことになる。あるいは連携校について入学前教育をする。入学してからは、導入期教育。入学してすぐに、専攻の学び方とか、4年間の過ごし方なども含めて、ゼミ形式で教育する。入学時の、熱いうちに鍛える企画である。それらの総合評価が結果に示された。〕

坂井 9つの言語について、交流協定を拡大してきた。本学の留学制度の特徴は「認定留学」にある。協定を結ん

でない大学でも、本学が認定して、支援金を出す。留学して行く学生について、留学期間中の本学におけるアドバイザー、指導教員をつけている。留学前から治安などについてアドバイスを受ける。だから学生諸君が行っている大学は、非常に多い。ここまで認めている大学は、少ない。そして単位を取得して帰ったら30単位まで認定する。さらに枠を広げる案も浮上している。

大学の4年間。あるいは4年プラスアルファの期間、学業という名目のもとに、自由に過ごせる。これは、すごく貴重な期間だと思う。その間に自由な発想とか、視野を拡大させる。

多くの場合、高校までは、ずっと大学に入ることだけを念頭に置いてきている。社会に出ると、自分の身を置いた所の視点から物事を見るようになる。そういう意味では、人生の中でいちばん貴重なのは、大学の4年間。視野を拡大し、発想の柔軟性を身につける大切な時間である。教師は授業を通して、それぞれの学生にいい刺激を与えるように努めねばならない。刺激を与え、大きな発想と志を学生が持つように相談にのる。学生と教師が

一所懸命に励むキャンパスでありたい。

本学は街なかとちょっと隔たっていて、密度の濃い生活空間がキャンパスの中にある。志をはぐくむうえで、絶好の環境だと自負している。ここ本山の地に荒木先生がキャンパスを選んだのは、神の恵みであった。



神宮球場で応援する坂井学長（帽子をかぶっている）

キャンパスづくりの40年

理事 西浦明(前、事務局長)に聴く

拡大と充実の連続

西浦 本学の施設整備は、いま4期目に入った。第1期は、開学から1979(昭和54)年までのおよそ15年間。おもに講義のための施設中心だった。教室棟や計算機センターの建設。それに正課体育のための第1体育館(いまの10号館のところ)。開学の初めから本学の建学精神や、厳しく学生を鍛える教育方針が高く評価されて、入学希望者が増え続けた。学部学科の増設に加えて、進学率が急に伸びた事情も重なって、本学の学生数は膨れ上がった。そのあとを追いかけるように教室棟を建てていった。

この第1期は創設者の荒木俊馬先生が学長あるいは総長として本学の基礎を固めた時期にほぼ重なる。先生の頭の中には、整然とした青写真があったはずだが、教職員は日々の教育、研究と事務処理に追われて手が回らない。計画の要点を示したあとは業者まかせ。建築業者に設計から施工、管理を全て委ねていた。

あのころの工事を振り返ると、乱暴なものだった。土木工事に発破はつぱを使っていた。いまの野外ステージのところに、大きな岩が出た。すると、ブルドーザーにドリルのついた機械で穴を開けて、火薬の袋を押し込む。「何時何分に発破点火します」と放送が入る。土曜日の午後、全校がクラブ活動を臨時に休んで学生は帰る。教職員も保安要員を除いて山から降りた。

開学のころは教室棟の中に、ベニヤで間仕切りだけした研究室が並んでいた。いつでも教室に戻せるように簡単な間仕切りにしたようだが、室内の音が隣近所の研究室に筒抜けだった。

第2期の1980(昭和55)年から初めて、設計と施工の業者を分けて、将来の展望を計画的に具体化していった。こんどは教員のための施設づくり。自然保護とか景観保存について、次々に規制がつくられる時代に入っていた。古都として、ほかの都市にはみられない厳しい規制がつくられて、本学の計画の前に立ちふさがった。ブルドーザーで適当に山野を削って建物をポンと建てる、というわけにはいかなかった。

行政からは施設整備の全体像を示すようにもとめられるようになった。このため日本でトップクラスの設計会社と一緒に、自然保護や景観に配慮しながら、官庁の許認可問題を含めて設計した。さいわい、隣接していた立命館大学のグラウンドの買収に成功したことで順調に進ん

だ。ここを中心に研究ゾーンをつくった。研究室棟を中心に、中央図書館、工学部の実験室棟、神山ホールなどをつくった。

第2期の建物は「和風勾配屋根」。高さ制限

15m以下だから3階建てまで。周囲に調和した材料、色彩にしなさい、と指導を受けた。第1期に建てた3号館をみると、5階建て、平べったい陸屋根で高さ15m以上ある。1期と2期の建物を見比べると、規制の歴史がわかる。第2期工事にかかるまで、本学は「白亜の学舎」といわれたが、全て茶系に塗り替えた。すると賀茂川越しに西賀茂からみると、学舎が山並みに溶け込んでいる。この塗り替えに億単位の費用がかかった。

第3期は、1993(平成5)年から2000(平成12)年まで。年数は短いですが、大学の将来にとって重要な施設整備をした時代。大学の規模が大きくなり、敷地を広げたい。理事会からは「学生の課外活動施設を充実する」方針が示された。つまり第1期が教学ゾーン、第2期が研究ゾーン、第3期は課外活動ゾーンということになった。

ところが、本山地区には課外活動ゾーン用の土地がもう、みつからない。キャンパスから遠いところは学生に利用しにくい。他の大学では随分と遠くに設けた例はあったが、本学の教育方針には合わない。課外活動は正課と両輪をなす、というのが創設者の考え方だったから。鞍馬街道の向かいの神山地区に目をつけたが、規制でがんじがらめ。市街化調整区域と風致地区、そのうえに歴史的風土保存地域が重なる。高さ制限を含むあらゆる規制がかかっている。ちょうど、京都市からの大学転出が騒がれていたころだった。京都市は転出防止策として、大学だけの相談窓口を設けた。そこへ相談に行った。それまでは京都市の開発指導を担当する課が窓口。建設業者と同じ扱いで「市街化調整区域には建築できない」「開発の許可はむずかしい」と、取りあおうとしてくれない。「大学がなんで宅造規制法の対象にされるのか」と反論したこともあった。こんどはその新しい窓口で「施設を充実させる目的であって、学生をむやみに増やすつもりはない」と説明して、話にのってもらった。

規制の窓口としては、ほかに消防署もあった。山を購入



西浦理事

して、いざ造成となったときに、山火事の発生に備えて半径150m以内に防火水槽を設けなさい、と指導されたことがある。それで京都市の窓口へ相談に行ったら「申請しても許可できない」と言われた。自然風景保全計画があるのに、そこで水をタンクに溜めるなんて、許可になるはずがないという。行政の指導の矛盾だが、こちらは、全てを丁寧に解きほぐしていかねばならない。

国有林の払い下げは荒木メモが決め手

西浦 第3期の課外活動ゾーンの整備には土地がいる。近隣をずうっと歩き回って、向かいの神山地区の土地しかないとわかった。ところが所有権の複雑な土地だった。民有地と国有林が入り組んでいる。いちばん大きいのは国有林。それでまず、払い下げの交渉に大阪営林局へ行ったら、なかなか渋い。大阪市の大阪営林局へ、大学の記録に残っているのだけで100回以上も通った。

買った決め手は、本学創設者の荒木俊馬先生の残した記録だった。京都産業大学の敷地を、現在の本山地区に決めた昭和30年代の終わりごろのこと。大阪営林局から国有林を何カ所か紹介されて、荒木先生が探査されている。向かいの神山地区の国有林、いま総合体育館が建ち第3グラウンドの造成にかかっているところもそのひとつだった。日当たりがいい。落ち着いた雰囲気はキャンパス用地にふさわしい。「ぜひ売ってほしい」と言ったら、「スギ、ヒノキを植えたばかりだから、30年後でないと売れない」と、当時の営林局長が説明した、という文書を学内からみつけた。さっそくに持参して、営林局長に見せた。「30年後なら売るとお約束いただいています」と。それで、話が一気に進んだ。

お役所相手の仕事には根気がいる。たとえば京都府の土地収用法の事業認定を受けようと、申請書類を持って行ったときのこと。収用法の認定を受けるためには、いくつかの条件がある。そのひとつとして、土地収用法で手に入れようとするれば「大学と隣接していること」が必要だという。隣接地であって、教育・研究に供するという証拠資料を付けないといけない。ところが「隣接地」というのは、国有林の払い下げが実現したら隣接地になる、という関係にある。しかし、いまはまだ申請中にほかならない。府は「営林署に一筆書いてもらってくれ」というし、営林署は「そんな証明書を出した先例がない」と門前払いされた。仕方がないから大学がみずから「疎明書」を書いて、なんとか府の了承をとりつけた。

神山の土地の買収では、地元の方々にお世話になった。国有林は、入り口が全部、民有地になっている。戦中・戦後の食糧増産で、イモ畑にするのに、全て払い下げた

から。取り付け道路もほとんどない。でも、入り口を買わないと、国有林だけ払い下げてもらっても、使えない。そこで、地元の事情に詳しいひとから買収対象の家の家庭事情、地元の名望家を教えてもらって、そのひとの賛成をまずいただく方針で動いた。2カ月間に60数回、地主さんのお宅を訪ねて、必要な10数筆の用地をようやく買収できた。

印象的だったのが、あるおじいさん。「産大ができる前に、設立準備委員長の名刺を持った荒木さんというおひとが、土地を売ってくれ、と訪ねて来はった。息子はんの運転する古い車に乗って」という昔話をしてくれた。教授陣に世界的な大学者が名を連ねてはいたが、そのころお金はない。学費の紙切れ1枚で、土地を売ってくれ、と言われておじいさん、びっくりしたという。創設者のご苦労の一端に触れた思いだった。地元のひとの協力があった、この大学が生まれ育ったのだ、ということも実感した。

国有林の払い下げが動き出すと、土地の評価額の問題が浮上した。交渉しているうちに、国有林の価格引き上げにはひとつのからくりがあることに気づいた。というのは、国有林の払い下げを申請するときに、役所は開発計画を出すようにもとめてくる。そこで、払い下げの国有林の3割を開発する計画を提出したとする。すると、専属的な立場の不動産鑑定所があって、その3割について宅地並みに評価して地価の鑑定を出す。山の値段はせいぜい1㎡あたり500円ぐらい、まして規制のかかった所は安いものだが、この鑑定でどーんと跳ね上がる。美観とか風致とかの規制をくぐり抜ける道筋は全て、大学側がつける。その結果の上に乗っかって高値で売ろうという作戦。さらに立木も買いなさい、と示唆される。ところが、京都市からは「その買った木は、伐つたらいかん、緑のまま残しなさい」とまた言われる。お役所は難しいところだとつくづく思った。こうして入手した土地が、開学当初に払い下げを受けた用地を含めて本山が25万㎡。神山が15万㎡ほど。それに総合グラウンドなどをあわせて校地は60万㎡にもなる。解決までの険しいやりとりはあったが、京都市の理解が得られて、建物の高さ制限は15mから20mへ緩和された。それから色彩。大学としては、景観に配慮しながら、一定の存在感も示したい。そう要望して、10号館、12号館、新5号館のように新しい建物について、明るいグレー系の色彩に仕上げるのができた。

第4期（2000～2015年）の計画で、鞍馬街道を挟んだ神山地区と本山キャンパスを陸橋で結ぶ計画がある。本学のランドデザインの具体化にあたっては、さまざまな

工事が進められることになる。それで、京都市に導入した「地区計画」の弾力的な運用を期待している。言葉を換えれば、建築規制の枠を外す制度を実現したい、ということ。京都産業大学という教育事業を展開していくうえで、京都市としてはどこまで規制を緩和できるのか。焦点は高さ制限と、自然景観との調和になるだろう。

震災対策の要は総合体育館 阪神大震災の教訓から
西浦 総合体育館の入札日の直前に阪神大震災の発生。神戸の多くの大学に避難のひとびとが押し寄せた。ある大学では、全て受け入れた。実験室にも研究室にも、ひとが入った。授業再開どころではなかったという。そんな事情を調べて、見積もり合わせまで進んでいたのを凍結して、危機管理対策に重点を置いて、設計を見直すことにした。

大学には、もともと公益財産管理法人としての使命がある。したがって本学は「学園庭園化構想」を打ち出して、キャンパス一帯の自然を保存し将来に引き継ぐことにしている。地域のひとびとに豊かな自然にいつまでも触れていただく。それに加えて、大学は震災にいかに対応すべきか、という問題がまさに起こった。

総合体育館を中心にした、神山地区の建物の構造について、日本総合試験所の審査を受けてはいたが、その内容を改めて見直した。そして体育館づくりのコンセプトの中に「避難者受け入れ施設」としての役割を加えた。すでに完成している神山地区の総合体育館は、3,500人を受け入れられる施設にしてある。地下1階の車庫は、救援物資の集積場に早変わりできる。さらにライフラインの確保にも配慮している。電気は西賀茂の変電所からきていたが、震災のときには停電のおそれが強い。だから送電系統を2本立てにして、松ヶ崎の変電所からも地下を通じて、22,000Vの送電線を引っ張った。10号館建築にあたっては、新たに特高電気室を設けた。これは1,000台単位で入っているパソコンの使用にも役立っている。

第3期では、進入路の問題も解決した。以前は正門から本館へ上がってくる道路1本だけだった。これでは万一、緊急車両が入る必要が起きたとき、車が学内に入れない。だから、もう1本、神山ホールの横から上がる道をつくった。周回道路もつくった。北消防署のいちばん大きな梯子車が、学内の道路で回転できるように道幅も整備した。それから空中を走っていた電線を全て地下ケーブルにした。幸いなことに昔、暖房用に使った地下のボイラー管がまだ残っていたので、そこに電線を入れた。少々の地震ならばくともしない。災害対策と景観保全を両立

させた一例である。

それともうひとつ、大教室棟の横などに、各棟を結ぶ渡り廊下に屋根がずうっとつけてある。雨対策だけではなく、安全性に配慮した頑丈な造りにしている。地震で窓ガラスが割れて落ちたときのガラス避け。上からいろんな物が落ちてきても、渡り廊下を歩いていたら、安全に下まで避難できる。

震災については、まだいくつか問題が残っている。大勢のひとが避難してきたときの食料と水、トイレ。震災に襲われた大学の話では、防火水槽や防火用の池は絶対に蓋をつけてはいけないという。消防車が来ないと使えないから。自然の池とか、防火貯水槽を残しておけば、トイレの水を流すのにも、バケツで汲んで流せる。そんな被災地ならではの適切な助言をもらった。10号館の横の池は、最初の設計では蓋をつけて上を舞台に使う計画だったが、とりやめた。

また、総合体育館の側に深さ110mの深層井戸を掘った。岩盤の間からすごくきれいで豊富な水量の水が出る。1分間に150L。万が一の場合、3,000人分の水を供給できる。ペットボトルもいま6,000本、総合体育館に備えている。9号館にも、昔からの井戸があり、水量豊か。いつでも使えるようにしてある。総合体育館完成のとき、地域ぐるみの大掛かりな防災訓練を実施し「明日を見守る」という防災パンフレットもつくった。地域のひとが避難して来たら、全部インターネットに登録して、誰がいま避難しているか、発信できる機能も備えた。

バリアフリーに留意した建物づくりにも力を入れてきた。エスカレーターは車椅子も使える構造になっている。12号館、13号館の建設については、エレベーターを利用して高低差の解消に役立てようとした。つまり2号館は1971年以前の建築なのでエレベーターがない。だから12号館のエレベーターを利用することによって、横へ移動ができる。地震のときには、2号館の中で下へ降りるのではなく、横へ逃げて安全を図る。阪神大震災のあと建てた新しい建物は全て、最新の耐震構造にしている。



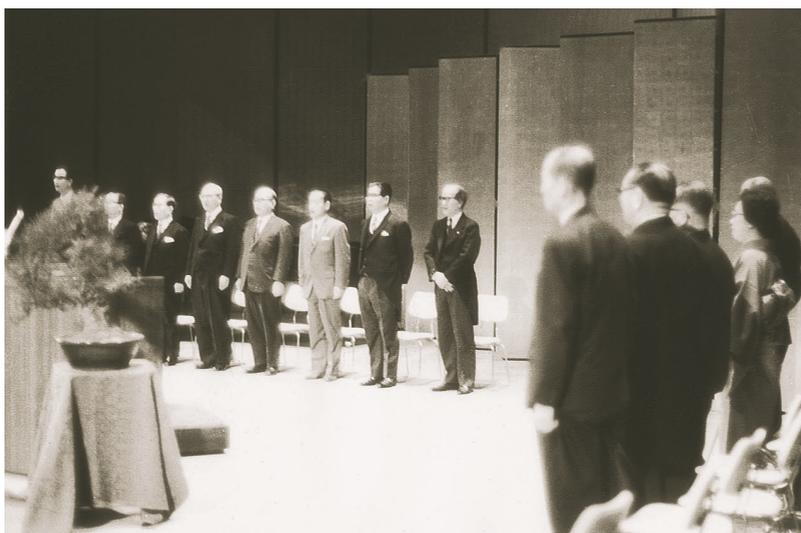
地震に備えて頑丈な渡り廊下

「日本最高の理想的大学を一緒に完成させよう」 荒木俊馬の第1回入学式告辞

- 入学式 -

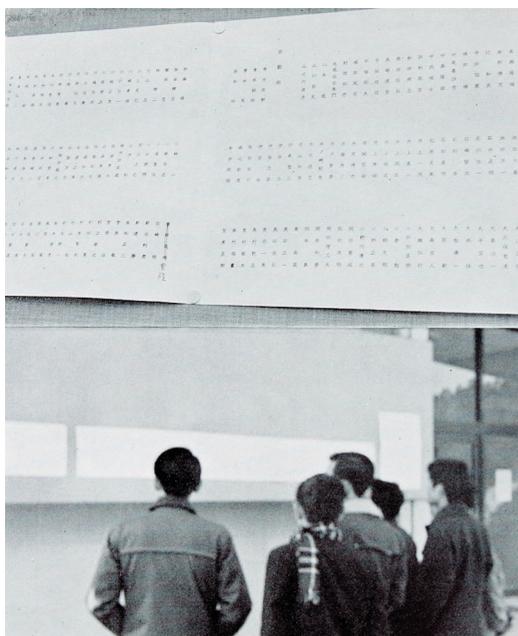


京都産業大学の第1回入学式 (1965.4.21 京都会馆)



第1回の入学式に臨む。荒木俊馬(前向き列の右端)をはじめにした創設時の教授陣

創設の同志・1期生を迎える



初の入学試験の合格発表は東山学園で。学舎は建築中、試験監督も東山学園の教諭の応援で乗り切った(1965.2)



本学初の学舎である本館の完成直後

- 開学式典 -



開学式典の催された1号館はまだ、建築さなかで、コンクリートの地肌剥き出し。
「日本の未来を担う人材を育てる大学が、いま船出した」と創設者・荒木は挨拶した(1965.11.27)



来賓の声援に感謝する荒木(写真手前の中央、右向きで頭をさげている)



教え子でもあるノーベル物理学賞の湯川秀樹博士が開学を祝った



式典会場(1号館)は建築の足場に覆われていた



開学式典を終えて

1963~1965

略年表

- 1963. 4. 本学設立の発起人会発足
- 8. 21 京都産業大学敷地として上賀茂国有林を選定
- 1964. 6. 1 京都産業大学設立準備委員会結成(事務所
 京都市中京区の千代田生命ビル内)
- 8. 31 学校法人京都産業大学寄附行為認可申請書を
 文部省に提出
- 9. 5 学舎建設の地鎮祭
- 9. 20 京都産業大学経済学部・理学部設置認可申請
 書を文部省に提出
- 11. 11 中央図書室を設置
 私立大学設置審議会の実地視察・実態調査
- 1965. 1. 25 「学校法人京都産業大学寄附行為」認可
 (昭和40年) 「京都産業大学経済学部・理学部」設置認可
 荒木俊馬、理事長に就任
- 2. 7 第1回推薦入学試験を実施
- 2. 13 京都地方法務局に「学校法人京都産業大学」
 設立登記
- 2. 19 第1回1次入学試験を実施
- 3. 29 第1回2次入学試験を実施
- 4. 1 京都産業大学開学 経済学部・理学部
 荒木俊馬、初代学長に就任
 教職員62人に辞令交付
 学校保健法に基づく保健室開設
- 4. 6 本館その他初期施設完成
- 4. 21 第1回入学式(京都会馆)
- 4. 23 講義開始
- 5. 1 評議員会開催
- 10. 1 電子計算機MGP-21設置
- 11. 25 全学学生自治組織の学生会結成(1966年、志
 学会と改称)
- 11. 27 開学式典(1号館)

志願者激増で活気のみなぎるキャンパス 学部増設の記念式典



第1回神山祭で若泉敬教授の記念講演の題は「国際政治と日本の安全保障」。政治に対する学生の関心は強かった



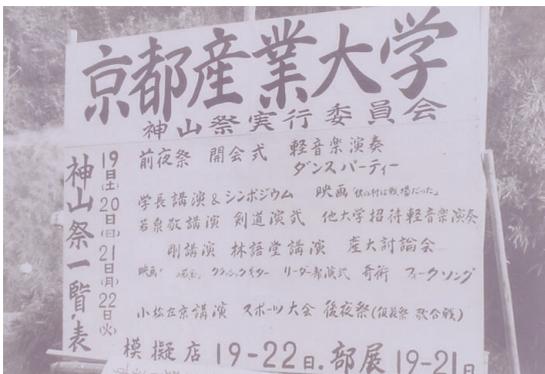
第1回神山祭開催。テーマは「創造期における我々の現実と役割」。創設期の熱気が伝わってくる(1966.11)



第1回神山祭の開催は1、2年生だけ。しかし、盛大だった(旧体育館前)



第2回入学式で宣誓署名を見つめる新入生



第1回神山祭の立看板



2号館着工(理学部棟、1967.7完成)、写真の左下段奥が4号館(法学部棟) 手前が大教室棟の、それぞれ着工目前のキャンパス内

法学部・経営学部・外国語学部 開学記念式 2号館 3号館 4号館 竣工



経済学部、理学部に続いて1967年度から法学部、経営学部、外国語学部が増設された。2号館（理学部）、3号館（外国語学部）、4号館（法学部）が完成、本学は急成長期に入った。壇上は記念式典の荒木俊馬（1967.5）



（左）3学部増設を祝って来学した谷川和穂・文部政務次官と岸信介・元首相（最前列の前向き、笑顔のふたり。左が岸・元首相）（中央）記念式典で荒木俊馬作詞、團伊玖磨作曲の学歌が発表された。（右）増設の記念式典のころ、本館から理学部棟のあたりは造成中、赤茶けた山肌のままだった



空路は肌に合わないトインビー博士夫妻は海路の来日、荒木夫妻が船上まで出迎えた

開業したての新幹線で東京から京都へ向かう車中の博士夫妻。後ろの座席越しに話しているのは若泉敬教授

トインビー博士の来学



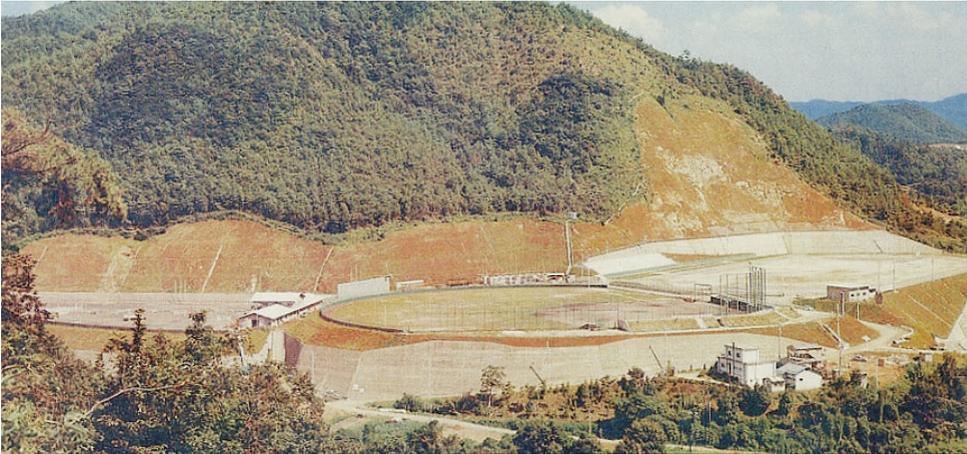
現代から未来へ、人類の明日をみつめる世界的な歴史学者の発する言葉を聞き漏らすまい、と日本国内から強い関心が寄せられた。本学の記者会見場は新聞記者、カメラマンで膨れ上がった（1967.11）

1966～1967

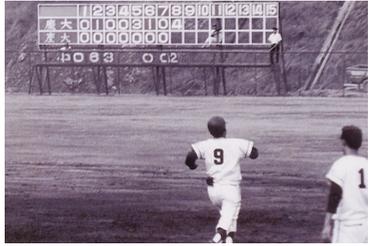
略年表

- 1966. 1. 22 理事会で経営学部・法学部・外国語学部の増設を議決
- 4. 1 東京事務所設置
- 4. 3 追分第1職員住宅完成
- 4. 8 追分寮完成
- 4. 15 1号館(教養部)・体育館・計算機センター完成
- 5. 15 世界問題研究所設置
- 6. 30 京都産業大学経済学会から季刊『産業経済論叢』創刊(第5巻第1号から『経済経営論叢』と改題)
- 11. 19 第1回神山祭
- 11. 21 林語堂博士講演会「近代科学と陰陽哲学」(103教室)
林語堂博士講演会「東洋の文化と西洋の文化」(京都会馆)
- 1967. 1. 11 市原第3職員住宅買収
- 1. 23 経営学部・法学部・外国語学部の増設認可
- 3. 15 追分第2職員住宅完成
- 4. 1 経営学部・法学部・外国語学部増設
- 5. 4 3学部増設記念式典
学歌発表(荒木俊馬作詞・團伊玖磨作曲)
- 5. 31 電子計算機TOSBAC-3400・Model-30設置
- 7. 1 2号館(理学部)完成
- 8. 3 3号館(外国語学部)・4号館(法学部)完成
- 8. 30 神山寮完成
- 10. 10 京都産業大学法学会から季刊『産大法学』創刊
- 10. 13 7号館(学生関係部室・食堂)完成
- 11. 2 輔仁大学(台湾)と交流協定締結
- 11. 16 アーノルド・J・トインビー博士講演会「未来の世界像と文化」(体育館)
- 11. 18 アーノルド・J・トインビー博士講演会「人口の都市集中化における問題点とその対策」(国立京都国際会馆)
- 12. KSB 学内放送開始

発展の槌音響くなか 第1期生巣立つ



総合グラウンド完成（硬式野球場、陸上競技場、馬場・厩舎）、野球場開きに東京六大学から早稲田、慶応の2チームを招いた



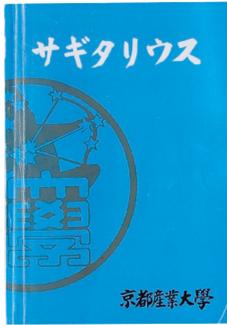
対慶応戦のプレー



3大学チームの入場行進



京都産業大学第1回卒業式。荒木俊馬は「諸君は開拓者だ、ありがとう」と卒業の祝辞を結んだ（1969.3.20）



開学四周年記念の『サギタリウス』刊行（1969.2）



京都産業大学報の創刊号（1969.4.21）。「人が増え、組織が大きくなり、学内の意思の疎通を図る必要が出てきた」と荒木の創刊の言葉



開拓者たち、その第1期生が巣立っていく



式後の懇親会で、教員と卒業生の話が弾んだ。ともに本学の草創期を支えた



1期生の卒業証書

キャンパスの変容.....開学の前後



鞍馬街道は地道で、本山の雑木林のふもとを走っていた(1963年ごろ)



本山の林(国有林)を調査する荒木俊馬(左=1964年ごろ)



京都市の都心のビルに大学設立準備の事務室開設。申請書類づくりに追われる荒木(左)と小野良介(後の理事長、右=1964年)



開学の喜びを胸に秘めた荒木、着工の鍬入れ(1964年)



着工前の本山をゴルフ場側からみる



開学。白亜の本館から校野を見下ろす



造成開始。本学の歴史が始まった



体育館づくり始まる



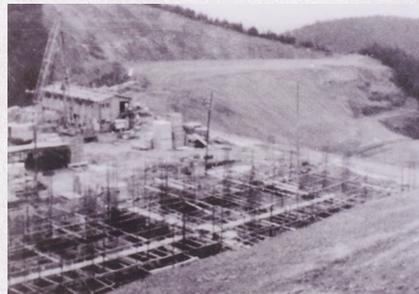
体育館完成。まだ理学部棟、法学部棟、外国語学部棟は着工されていない。右はほぼ同じころ、上空からの撮影



校地が姿を現してきた



体育館の完成間近。左方の三差路が、2005年現在のエスカレーター降り口付近



理学部棟の建築始まる。右方の5号館や大教室棟のあたりはまだ、整地にとりかかったばかり



大教室棟の建築始まる



土煙の中に本館の骨格が浮かんでいる



5号館に続く大教室棟は完成間近

1968~1969

略年表

- 1968. 2.15 電子計算機TOSBAC-3400・Model-30をModel-40に置き換え
- 3.15 5号館(経済学部・経営学部)完成
- 4.1 計算機科学研究所設置
- 4.30 学旗制定
- 5.31 電子計算機GAMMA-10設置
- 5. 計算機による図書館業務の機械化開始
- 7.10 大教室棟完成
- 8.1 市原第4職員住宅完成
- 8.30 硬式野球場完成(総合グラウンド第1期工事)
- 10.30 ハーマン・カーン博士講演会「21世紀の世界と日本」(体育館)
- 11.30 陸上競技場完成(総合グラウンド第2期工事)
- 12.1 『京都産業大学計算機科学研究所彙報』創刊
- 12.23 馬場・厩舎完成(総合グラウンド第3期工事)
- 1969. 1.6 理学部に応用数学科増設認可、経済学部・法学部定員増認可(各200人 300人)
- 2.17 8号館(第1食堂)完成
- 2.26 小野良介、理事長に就任
- 3.20 第1回経済学部・理学部の卒業式
- 3.27 大学院経済学研究科(経済学専攻)理学研究科(数学専攻・物理学専攻)修士課程設置認可
- 4.1 荒木俊馬、総長に就任
計算機科学研究所の公開講座を開講
- 4.19 ハーマン・カーン博士講演会「大学問題とスチューデントパワー」(体育館)
- 4.21 『京都産業大学報』創刊(～2000年3月まで)
- 4.23 ハーマン・カーン博士講演会「再び21世紀の世界について」(体育館)
- 4. 計算機による教務課業務の機械化開始
- 5.20 パレーコート完成(総合グラウンド)
- 6.11 教学委員会設置
- 11.1 『京都産業大学経済経営学会研究叢書』創刊
- 11.18 総合グラウンド管理棟完成
- 12.25 同窓会発足

荒木俊馬総長がコペルニクス生誕500年で記念講演 ポーランド



レイモン・アロン博士の来学 (1970.10)



本学で講演中のアロン博士



学生に対する演題は「近代社会における自由」



国立京都国際会館の演題は「変貌する産業社会」。アロン博士の思想家、歴史哲学者、社会学者として奥行き深い内容が満員の聴衆の心に響いた



OECD教育調査団来学。本学の先進的なコンピュータ教育と実用化の努力に強い関心が示された (1970.1)



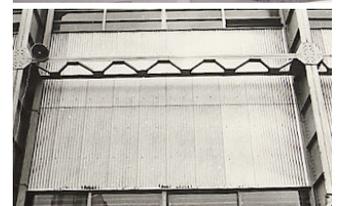
雪の舞う第2回卒業式。本館前で先輩を送るために肅然と待つ空手部員 (1970.3)



未来学者のハーマン・カーン博士は来学4回、本学の学事顧問として学生に多大な影響を与えた。講演だけでなく、学生の座談会にも快く出席した



第5回神山祭の立看板が並び



第2回卒業式と、会場の旧体育館

第 40 年の歩み



座談会には荒木も同席して博士の話に耳を傾けた



講演会場の体育館へ荒木とともに向かうカーン博士

卒業式々次第
 一 国歌斉唱
 一 国関の詩
 一 卒業證書授与
 一 卒業生代表挨拶
 一 卒業生代表答辞
 一 卒業生代表答辞
 一 閉校式
 一 閉校式
 一 閉校式
 一 閉校式
 以上



1971年度入試の合格発表。手書き文字が懐かしい



スペインの歴史哲学者、文明史家、作家でもあるコラル博士来学。講演会は京都会館で「国際主義ヨーロッパと未来のヨーロッパ」(1972.2)



歴史学者のエルドマン博士来学、講演会「20世紀の国際政治上のドイツ」(1971.10)



ノーベル経済学賞の経済学者サミュエルソン博士来学、講演会「ニクソンの新経済政策」(1971.10)



アルバトフ夫妻を荒木夫妻、小堀憲教授ら拍手で出迎え



アルバトフ博士を紹介する荒木



学生、教職員に対する講演に感謝して握手を交わす荒木



ソ連の歴史哲学者アルバトフ博士来学、講演会「世界の中のソ連邦」(1972.10)



3号館の増築工事進む(1972.12完成)



ヴァイツゼッカー博士の来学、講演会「自然の統一性と科学の将来」(1974.11)

コペルニクス生誕500年の式典で講演する荒木俊馬(写真左端の壇上、1973.9)

1970~1974

略年表

- 1970. 1.12 経営学部定員増認可(200人 300人)
法学部に法学専攻科の設置認可
- 1.17 フォール元仏首相ら OECDの教育調査団来学
- 3.30 保健管理センター棟完成、守衛棟完成
- 4.13 ハーマン・カーン博士講演会「新入生に送る言葉」(体育館)
- 7.1 「教育改革に関する中間答申書」総長に提出
- 8.1 新教育課程実行計画審議会発足
- 8.4 五常寮完成
- 10.20 保健診療所発足、社会保険診療業務を開始
- 10.21 レイモン・アロン博士講演会「近代社会における自由」(体育館)
- 10.24 レイモン・アロン博士講演会「変貌する産業社会」(国立京都国際会館)
- 10.25 2、3号館前野外ステージ完成
- 12.10 第2グラウンド完成
- 1971. 1.11 外国語学部外国語専攻科の設置認可
- 3.2 電子計算機GE-115設置
- 3.11 理学部応用数学科を「計算機科学科」に名称変更
- 3.26 荒木俊馬、理事長に就任
- 3.31 大学院経済学研究科と理学研究科に博士課程の設置認可
- 4.1 教養課程一般教育科目にコース制実施
- 4.8 ハーマン・カーン博士講演会「超大国日本の挑戦」(体育館)
- 4.26 第2体育館完成
- 10.20 カール・D・エルドマン博士講演会「20世紀の国際政治上のドイツ」(514教室)
- 10.22 ポール・A・サミュエルソン博士講演会「ニクソンの新経済政策」(514教室)
- 1972. 1.30 『京都産業大学論集』創刊(社会科学・人文科学・自然科学・外国語と文化系列)
- 2.14 ルイス・ディエス・デル・コラル博士講演会「国際主義ヨーロッパと未来のヨーロッパ」(京都会館)
- 3.30 大学院法学研究科(法律学専攻)修士課程の設置認可
- 5.1 漢字テレタイプ設置
- 6.10 津ノ国寮・職員住宅完成
- 10.27 ゲオルギ・A・アルバトフ博士講演会「世界の中のソ連邦」(514教室)
- 12.18 3号館増築完成
- 1973. 1.1 緑化委員会発足
- 3.1 電子計算機GE-115をGE-120に置き換え
- 4.1 磯村咄夫、理事長に就任
電子計算機TOSBAC-3400・Model-40をModel-41に置き換え
- 9.10 荒木総長、ポーランド科学アカデミーの要請を受けてコペルニクス生誕500年式典で講演
- 10.26 学生スクールバス待合所完成
- 12.8 電子計算機HITAC-10 設置
- 1974. 3.28 大学院法学研究科に博士課程の設置認可
- 4.1 京都産業大学奨学金制度新設(1983年度から京都産業大学給付奨学金制度と改称)
- 5.1 年刊KSU Economic and Business Review 創刊
- 6.1 『Lib.』京都産業大学図書館報創刊
- 9.18 法学部法学専攻科廃止
- 11.4 C・F・フォン・ヴァイツゼッカー博士公開講演会「科学技術時代に於ける人類の将来」(京都府立勤労会館)
- 11.6 C・F・フォン・ヴァイツゼッカー博士講演会「自然の統一性と科学の将来」(514教室)
- 12.9 第1学生クラブハウス完成
- 12.25 経済学部・経営学部・法学部の定員増認可(各300人 400人)



来学したトインビー博士。学生と教職員は大拍手で出迎えた（1967.11）

アーノルド・トインビー博士 壮大な世界観を語る

京都産業大学および国立京都国際会館で講演

創設者の荒木俊馬は、世界の碩学を本学に招いた。学生への講演のほか、教員との討議の場を設けた。碩学たちも、この若い大学に好意を示して、時間の許すかぎり話し合った。「世界的頭脳に接し、その言葉に触れること。

それによって真剣に学ぶ心が培われる」と荒木は話している。

1966年来学の林語堂博士をはじめ1974年のヴァイツゼッカー博士までの9人の世界的学者来学の軌跡をまとめた。



トインビー博士を紹介する荒木俊馬（国立京都国際会館）



満員の聴講者（国立京都国際会館）

地球の未来は。人類はどこへ。私たちはいま何をなすべきか。

来学の碩学
その横顔

人類の未来を
洞察する
世界の頭脳



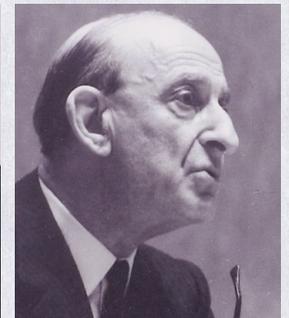
林語堂氏
Lin Yü-tang
1966.11 来学、中国出身の言語学者



アーノルド・トインビー氏
Arnold J. Toynbee
1967.11 来学、イギリスの歴史学者



ハーマン・カーン氏
Herman Kahn
1968.10 来学、アメリカの未来学者



レイモン・アロン氏
Raymond Aron
1970.10 来学、フランスの哲学者